

一 少将出家

本(もと)よりかかる御心ありけれど、父(ちち)おとどおはしけるほどは制(せい)しきこえ給ひければ、えおぼしたたざりけれど、失(う)せ
給ひてのち、腹(はら)々の君(きみ)たちはみな心とおはしませば、おとどおはしまさねども、ことに物(もの)しき事(こと)もなし、この齋(さい)宮

の御腹(はら)の女君(によきみ)は、まだともかくもなくしておとどのかしづき給ひしにかかりておはせしに、さもあらねば、ただこの御
兄人(せうと)たちを、むつまじきものにかたらひきこえ給ひて、世の中(よのちゆう)のあはれなることをおぼししを、見(み)たてまつり給ふ
を、かた時見(ときみ)たてまつらではえおはしますまじけれど、もとよりかかる御心ありけるうちに、御めのおはしけれ

5

ど、それも里住(さとす)みにてことなる事もなくて、よろづのこと心(こころ)ほそくおぼえ給ふままに、ただこの事(こと)のみ御心(ごこころ)にいそ
がれ給ひつつ、出(い)で給ふたびごとには、女君(によきみ)に「法師(ほうし)になり(な)に山(やま)へまかるぞ」ときこえ給ひければ、「例(れい)のこと」と、
たはぶれにおぼしてなむ、きこえ給ひける。「まことにこのたびは」ときこえ給ひければ、「例(れい)のよきりはかへり給へ

らむをこそは法師かへるとは見め」ときこえて笑ひ給ひければ、「まことぞや」ときこえて出で給ひければ女君「法師にならむと侍るは我をいとひ給ふなめり」とて、

あはれとも思はぬ山に君し入らば麓の草の露と消ぬべし

ときこえ給へば高光の少将の君

わが入らむ山の端になほかかりたれ思ひないれそつゆも忘れじ

と申し給ひて、愛宮の御許にまで給ひて、立ちながら出で給へば、「ものきこえむ」とのたまひければ、「などえのぼり給はぬ」ときこえ給ひけれど、涙もいで給ひければ、「いそぎ物へまかる」ときこえ給ひて、ことなる事もきこえ給はで出で給ひて、比較にのぼり給ひて、御弟のおはしける室におはし、とう禪師君を召して「かしら剃れ」とのたまひければ、いとあさましくて、禪師の君、「などかくはのたまふ。御心がはりやし給へる」とて、のたまふままに泣き給ふ。

「剃それ」とのたまふ。阿闍梨も泣なきてうけ給はらざりければ、御もとどりを手てづから剃か刀ざりして切り給たまひにければ、い
かがはせむとて、なほ剃そり給たまひける。禪師ぜんじの君きみ、泣なきまどひ給たまひけり。阿闍梨も「いとあさましきわざかな。御はら
からの君たちも、おのれをこそ、の給はめ」と、「御消息おんせうじをたにもきこえあへずなりぬる」と泣なく。禪師ぜんじの君きみ「か
うかうなむ、いとにはかにあさましく」と、京の殿ばらにきこえ給ひければ、いみじうあさましがり、ののしりけれ
ば、内うちにてきこしめし驚おどろきてけり。御妹いもうとの君きみなども泣なきまどひ給ひけり。女房も泣なきまどひて、物もおぼえ給はずあ
さましきに、いさざかなる物もまゐらで泣なき給ひける。宰相中将君をはじめたてまつりて、驚おどろきとぶらひきこえ給
ふ。山にみな登のぼり給ふとて夜なかにぞおはしける。中宮より初はじめたてまつりて驚おどろきとぶらひきこえ給ふなかに、御乳おの
母とと愛宮あいとなむ、物もきこしめさず泣なきまどひ給ひける。

二 女君と愛宮の贈答

かくいひて、いふかひなくて月ごろになりぬ。女君は、尼になりなむと泣き給ひけり。愛宮の御許になむ常に悲しきことを通はし給ひける。

「尼にも、ここにもとなむ思ひ給ふる。ひとたびになり給へ」と愛宮の、女君の御許にきこえ給ひければ、

「尼には、誰もなるとも、同じ山には入らざらむこそかひなけれど、横川の麓までだにと思ふ給ふるに、それもかたくや」かくきこゆるに、

「いづくにもかくあきまましきうき世かはあなおぼつかな誰に問はまし」

と愛宮にきこえ給ひければ女君、

「尼にと思ひたまふれども、げに誰も同じやうにしり給はざらむをなむ。同じうきよかはと思ふ給ふべき。うから

ねばこそ登りおはすらめど、山にてもといふこともあらばとなむきこえまほしきを、このかみもこの世をそむきて、あはれなる人の住み給ふらむ横川をわたりて御影をだに見るまじくとも、猶、そむきても行ひ侍らまほしきを、宮にも、しかぞ又おぼしめすなる。御ともにもと、

〔原本コノ次二面（約三百字ニ当ル）白紙トナツテイル。早く脱落シテ了ツタモノデアロウ〕

かき、妹をみずはといふこともなきにこそは。まことや、誰に問はましか、住み給ふ人にこそ問ひきこえぬ。うからねばこそ、

ながれてもきみすむべしと水のうへにうきよかはとも誰か問ふべき」

となむきこえ給ひける。つねにこの二所、かなしうあはれなることをなむ聞えかはし給ひける。

三 桃園の権中納言殿の中將

かくて、かの桃園も、ぞ、あ、の権中納言殿、の中將、の君きみまるり給たまひたりけりと聞きゆる人ありければ、うちおき給たまひて見みまゐらせ給たまひて、のたまふ。

「あはれなるなにはおふやとみつれどもかたちはことにあればかひなし

かたちもことになり給へりと聞きけど、そのすぢにはあらねば、あはれにもあらず」と聞きえ給たまひけるを、その北きたの方かた、
みたまひて、

あふことのかたちはことになれりとも心だに似にばあはれなりなむ

と聞きえ給たまひければ、その御返へかへし、

もとむともかひやなからむたぐひなくあはれにありし君きみが心に

とのたまひつつ、をりふしごとに泣き給ふを、うけ給はる人ごとにあはれがる。

四 姉北の方

三月ばかり驚なきければ、北の方

わが身にも世をうぐひすと泣きをれど君がみやまにえこそ通はね

姉北の方の御返、

山路しる鳥にわが身をなしてしが君かく恋ふとなきて告ぐべく

五 愛宮の御許より

かくて愛宮の御許よりきこえ給ひける、

「なぞもかく生ける世をへて物を思ふするがの富士のけぶりたえせぬ

あはれ、あはれ、そこにもいかにとなむ思ひきこゆる。夢にも山の君の見え給ふをりは、さめてくやしくなむ」ときこえたてまつらるれば、御返、

物思ひはわれもさこそはするがなる田子の浦波たちやまずして

となむ。

六 ほととぎす

誰も誰も御はらからの君たち、この愛宮の泣き悲しび給ふを聞き給ひて、あはれがりきこえ給ふも、物を聞えでおはしふる。ときどき故式部卿の北の方は、時々とぶらひきこえ給ひける。四月ばかりに卯の花につけて、

君のみか我もさこそは世の中をあなうの花となくほととぎす

かへし、

うの花はなのさける垣根かきねにほととぎす我はまきりてなくと知らなむ

又式部卿の北きたの方、ももぞのどのに聞きえ給ふ。「猶思なほおもふ思くふともあさまし。やまにてもいかにつきせずおぼすらむ。ゆめもあらば、

あはれなることかたらひてほととぎすもうごゑにこそなかまほしけれ」と。

御かへり、「かしこまりてなむ。いとあらとまうれしく、かく常に問とはせ給ふことなむ、つきせぬことには。いでや、いでや、すべてすべく、たどおしはからせ。まことや、

かたらはぬさきよりなきつほととぎすもの、あはれを知れりと思おもへば」

七 三の宮より愛宮へ

かくて按察の大納言殿の北の方、愛宮の御許に、「このごろはいかが。あやしう物さわがしく思うたまへられてなむ、しばしも聞えぬ。あはれ世の中をいかにながめ給ふらむ。こなたにもなか渡り給はぬ。山よりはとぶらひきこえ給ふや。さもこそは世はそむき給はめ、しのびてもいでも、おほむもとは、かたらひきこえ給へかし。女の通ふ所ならば、さて通はまほしくなむ思へど、今こそあはれな。いかにそこにも、世の中、心かなはぬをりは、山へ入りぬべきをりあれど、えやは世の中をそむく。まがまがしく、尻にならむとのたまふなる、まことか。ゆめゆめ、しかなおぼしそ。

うらみこしそむかまほしき世なりともみるめかつかぬあまになるなよ」

愛宮の御返し、「いとうれしう問はせ給へるなむ。つれづれなるに、これよりこそ聞えまほしけれど、常にさわがし

うおはしますすらむにとぶらはせ給ふを喜びてぞ、そなたにも参らまほしきを、明け暮れのながめに袖のひちつつ物おほえぬになむ。山よりとときどき音づれ給ひ、かしら刺り給へらむ姿の見・たまへまほしきに、見え給はぬがうき世の中にかへらじとにやあらむと。尼には、さもやと思うたまふれども、さても猶世の中にこそ思ひかへりこめと思つたまふれば、まだ思ひたらずなむ。

あまならでそれにもしほはたるれどもうきめかづくとまたはなるべき」

八 断 章

よにはしりて山路にまどふ心も

弟の禪師の君、

出でてこし人の家路も思ほえずわがみやまこそ住みよかりけれ

九 右衛門佐愛宮を訪ふ

かくて愛宮の御許に右衛門佐おはして、少将の君おはしつるやう語りきこえ給へば、「わればかりうき身はなし。

男はおはし通ひたぶ」と、

山の井の麓にいでてなかなむ恋しき人の影をだに見む

とのたまへば、佐の君の御返、

君がすむ山川水にあさましくうき世の中になかれいでにし

一〇 あけの衣

さてかの桃園の姫君、少将の君の御袖に涙のかけり、ぬれたりければ、

ほのぼくとあけの衣をけさ見れば草葉の袖は露のかかれる

佩き給ひし御佩刀の、枕上なるを見給ひても泣き給ふ。さぶらふ人々、上下、「かの御身より涙の流れ出でぬ

る」ときこえ給ひければ、姫君

津の国の堀江に深く物思へば身より涙もいづるなるらむ

人々北の方に聞え給ひければ、あはれがり給ひて、

ともすれば涙をながす君はなほ身をすみがまかこまもたえせぬ

二 鏡の影

又少将の常に見給ひし御鏡を姫君見たまひて、「法師は鏡は見ぬか」とて、かはしきのしたに入れ給ふ。

常に見し鏡の山はいかががあるとかたちかはれる影も見よかし

山にもて参りたる御文に、いとあはれ多かる、御返りに、

鏡山きみが影もやそひたると見ればかたちはことにぞありける

三 うしほやくあま

誰々も、かの姫君の御なげきを、あはれがり給ひけり。ももものの、ことに聞ゆるに、男君、常におはして、あはれがり給ふ。御文にてもありけり。

姫君、「なほ世の中心うし、尼になりなむ」との給ふを聞きて、少将の君、

尼にても同じ山にはえしもあらしなほ世の中をうらみてぞへん

かへし、

そでのうらに身をうしほやくあまなればみるめかづかであらむものは

三 御精進

さてこの姫君「山の君の行ひ給ふらむ、われ魚食はむこそゆゆしけれ」とて、御精進をぞなほし給ひける。山の君まこしめして、あはれとおぼして、ここかしこよりをかしき精進物まらせたるは、時々たてまつりおくるにかひにおきたるめをはじめていれたり。又四月つごもりばかりに、鶯の巢三つばかり、むめすちばかりいれたり。

「頼みなくはかなく見ゆる我ゆるに君がながめを思ひやるかな

あはれあはれ、ときこゆ。かひなくおぼすな。まことや精進し給ふなるは。しほうらこえぬ山なれど、こころざしありておひいでたるめぞや」とあり。鶯のおふすちには、「かくぞせん」とあり。

「わがすみか君はゆかしくおもほせばあなうぐひすの巢のうちを見よ

かへし、

「恋ひて寝し君なき床のいはなみにこのながめに袖のぬれぬる

しのびきこゆるかひもありけるかな

鶯の巢のうち見てもねをぞなく君がすみかはこれかと思へば」

一四 苔の衣

さて中納言殿の北の方、この君の御装束、袈裟より初めて一くだりせさせ給ひて、これ山へたてまつりければ、山へたてまつり給ふ。

「この御衣どもの、いとあはれなれば、忘れては誰がことぞとおぼめかれつる、

君が着しきぬにしあらねば墨染のおはつかなきに泣きてたちつる

なほなほ

奥山おくやまの苔こけの衣ころもにくらべ見みよいつれか露つゆのおきはまきると「

となむ聞きこえ給たまひける。上うへの御衣ごぞよりはじめて墨染すみぞめなり。ただ袷いあはせの御袴はかまぞかいねりなりける。山やまの御ごかへり、

「山伏やまふしは昔こけの衣ころもなどのみこそ身みには添そひ（原本ココニテ十八丁ウ終、次ノ一六段ノ末、近クマデ脱落、前田綱元手沢本ニテ補フ）たれ。これは身みにも合あはぬものどもなれど、御心ごこころざしあるものどもにてなむ賜たまはりぬる。昔むかしの着物きものにもあらねばやおぼめい給たまひつらむ。今いまよりならひ給たまへかし。

わいても、こと人のころもがへやしたまふらむ。あたらしくそでぬれぬ。ぬぎ給たまはばもこの色いろわすれ給たまひなむ。まことや、墨染すみぞめのきぬはきたまふなればにやいとどぬれまきりてなん。

佗むびぬればくものよそよそ墨染すみぞめの衣ころものすぞ露つゆけかりける

露霜つゆしもはあした夕ゆふべにおく山の苔こけの衣ころもは風かぜもとまらず」

となんありける。

一五 さらに京に出でじ

さらに京に出でじとぞの給ひける。これをこの姫君・愛宮、おぼつかながり給ふ。兄弟、おこなひなん、よくよくし給ひける。母君・父大殿をなむ、いといと、よく恋ひたてまつり給ひける。

愛宮の御許に、桃園の大姫君のたてまつり給ひける。

「物思ひのやむよもなくてほどふれば（下句欠）」

一六 しのぶの草

「上句欠」忘るることもしるのわかきか

太刀はきたるを見れば、絵にかきたるさへなむ悲しう侍りける。今日の御かたちは知らず、昔のみ面影には見え給ふ。140

そこにはいかかがとなん聞え侍る。つれづれの御すまひなればにこそ、思ひすてられける忍草うとからずや御らんずらむ。ここにも、

独(ひと)のみながむる宿のつまごに忍ぶの草ぞおひまきりける」

「うけ給はりぬ。これよりも聞えむと思ふ給ふれど、袖ぬらすながめに明かし暮らすほどに怠り侍りにける。つ

きせぬ物思ひは、いつはてなん。親たちにおくれたてまつりたるに、ましてかかる物思ひの添ひて侍れば、おぼしやれ。よもぎのしげき宿に立寄り給ひて、あはれとの給ひし御姿の見えねば、月日ふる(ココマデ原本脱落)ままに
は、いとあはれに侍る。かたちことになり給へらむ御姿を、時々見え給はば、なぐさむらむをいでじとのたまふな
るこそ、いといとおぼつかなけれ。忍草はここにもや、

しげりますしのぶの上におきそふる我が身ひとつは露のほどにぞ

思ひ消えなで、生きて」となむありける。

一七 早うより心かけたりし人

さてこの姫君に、早うより心かけきこえたりし人も、とぶらひけり。それが聞え給ふ。「などかこの君を山に入り給ふべく見給ひぬべきことはあらせたまつり給ひし。まろこそ、昔、山住みはせんと思ひしか。人に物思はせ給へりし報いにおぼしめせよ。まめやかには、山に住み給ふよりも、とまりて独寝し給ふころ、いかにねおたからずおぼすらむと思ひたてまつりて、

こそ高くあはれといはば山彦のあひ答へずはあらじと思ふ。」

よしづいてとて、かへりごとし給はず。悲しきまさをりける。

又ほどへて、

「やまとなる耳無山の山彦は呼べどもならたきひも答へず」

こたみも、とりいるる人を見まほしとてない給ふ。

一六 京の殿より

京の殿より御文に、「このごろはいかにおぼすらむ。ここには心細きを、いとあはれになむ。ここには、このつき

160

涙とどめずそこにおぼすらむを思ひたてまつりて。屁にならむとさへのたまふなる、つねは世の中にさぞおぼすら

む。ここにぞうき世をばそむきはてなむと、いさや世の中に、ないしかみのぬしといふなれば、かしらおろしては、

かうぶりとられなんと人のものすればなむ、いさきかうしろのこして侍る。精進をさへし給ふなれば、若き人だに深

く物をおぼすなれば、ここにはまして水風のいもひをせましとなむ。屁にてもうき世をば離れずや。なほしかなおぼ

しそ。

165

舟ながすほどひさしといふなるをあまとなりてもながめかるてふ」

と聞え給ひけり。御かへし、

「かしこまりてうけ給はりぬ。いとうれしう、常に問はせ給へるをなん。みづから申さまほしう思う給ふれど、このごろ、みだり心ち、例よりもまさりて、あやしう侍りてなむながめ侍る。

あまとても身をしかくさぬ物なればわれからともうきめかるなり

とうけたまはれば、思ひも定めず」と聞え給へり。

一九 太刀はきたる姿

又右衛門佐、中納言殿につたへ給へりけり。ついでに大姫君の御方につたへ給へりけり。

忘れてもうれしかりける君かとてたそかれどきはまどはれぞする

昼寝して起き給へりけるほどなりけり。右衛門佐「立ちながら聞え侍る。あやしけれども、いそぎて内へ参り侍れ

ばなん。いかにとて、えしばしばも聞え侍らず」とて、「いかに世の中を、太刀はきたるさまをも見給ふとてなむ」と聞え給へる御返、「いと嬉しう立寄り給へるを、いそぎ給へばなん。姿は、たそかれ

どきにおぼつかなくなむ。ここには、それにもあはれになん。つれづれのながめに、すまひさ

へかはりたれば、あの人の影も見えねば、心細きを、問はせ給へるなん」と聞え給へば、「さらば静かに参らむ。太刀はきたる姿も見給はむとあらば、ゑりくぐつにてもさふらはむ」とて出で給ひぬ。

三 宮のこのかみ

宮のこのかみの、殿にて人たまへるついでに、ようきりつかた、月のほのかなるに、立寄り給へり。

「昔きくやどのありしえに、いかにぞや、山人はしのびてをり給ふや。あいなく、

あしひきの山よりいでん山彦はそま山水におとさなからなん」

と聞え給へれば、「いと嬉しく立寄りて問はせ給へるを、はじめは嬉しかりつれども、のちの御言葉にさしあやまち
て、いとどしくさまも見えで」とて、歌の返しは聞え給はず。さかさうのやうに人もこそ聞け。をとこのきむだち
は、しばしこそあはれがり給ひしか。愛宮ぞおぼしやむことなかりける。

三 長歌贈答

さてこの姫君、身をや投げてましとおぼせど、きむだちのおはしければ、われなくてはいかがせむとおぼして、山
に聞え給ふ。「世（原本コレ以下二行ホド切断）……おのれだになくはいかがせんと思ふに、すこし露のいのちをもとめ
る。つる。

君やうゑし われやおほしし、なでしこの ふたばみつばに おひたるを かせにあてじと おもひつつ、はな
のきかりに なるまでに いかでおほさむと おもへども つゆのいのちやあへせらむ いまぞけぬべき こと
190

ちのみ つねにみだるる、たまのをも 絶えぬばかりぞ おもほゆる ものかすにも あらぬ身を ただひと
ゑとて あさましく あまたのことを 思ひいでて、 きみぞのみ世に しのぶぐさ やどにしげくぞ おいの世
に こひてふことも 知らぬ身も しのぶることの うちはへて きてねし人も なきとこの まくらがみを
ぞ おもほしき ことかたらはん ほととぎす 来ても鳴かなん 世をうしと きみが入りにし やまがはの
水のながれて おとにだに 聞かまほしきを ほだされて 世にすみのえの みつのはに むすべることの
なかりせば つねにおもひを たきものの、ひとりひとりも もえいでなまし」

山の御返し、

「もうとものに 撫でておほしし、 なでしこの 露にもあてじと おもひしを あなおほつかな 目に見えぬ は
なのかせにや あたるらむ と思へばいとぞ あはれなる いまも見てしが と思ひつつ、 ぬる夜のゆめに 見
ゆやとて うちまどろめど 見えぬかな 目のうつつまに かぎりなく こひしきをりは おもかげに 見えて
200

も心　なぐさみぬ　かたみにさこそ　みやこそば　おもひわするゝ　時ときやはある　はるけきやまに　住すまへ
ども　つかまわすれず　おもひやる　くもるながらも　あしがきの　まちかかりしに　おとらずぞ　あはれあはれ
と　まてもかる　よとともこそ　しのぶぐさ　わがみやまにも　ふもとまで　生なふと知らなむ　しらかは
の　ふちも知らずは　ひたぶるに　きみがたにのみ　うきよかは　うれしきせをぞ　ながれては見む」
となむありける。

三　御はらからの君たち

五月ついたちに、御はらからの君きみたち、わりご具ぐしておはしたりけるに、雨あめの降ふりたりければ、いしをきみ、
かかりてふよかはともへどきみだれていとど涙なみだに水みづまさりぬる

少納言、

君がすむよかはの水やまさるらむ涙の雨のやむよなければ

右衛門佐

草深き山路をわけてとふ人をあはれと思へどあとふりにけり

宮権亮、

いづくへもあめのうちよりはなれなばよかはに住めばそぞぬれます

となむ。

三 富小路の君たち

富小路の君たち、わりごしつづ、まで給へり。六郎ぎみの聞え給ふ。

「世の中、心うければ、おのれこそ、かしらそらむ、山へ入らむと思つたまへしかど、おとどの君のかくしたまは

で失せ給ひにしかば、罪深くなると思ふ給へて、思はぬ山々にありくこと、今に思ひ侍れど、君の思はずにておはすれば、御弟子にもやなりなましと思ふ給ふる」とのたまへば、禪師の君、「弟子まさりにこそあなれ」と聞え給へば、六郎きみ、「弟子まさりとおぼさばこれより深からむ山にこそ入り侍らめ、いづくならむ」とて六郎きみ、

都へもさらにかへらじわがごとく罪深き山いづこなるらん

禪師の君、御かへし、

これよりも深き山辺に君いらばあさましからむ山川の水

四郎きみ、

君をなほうらやましとぞ思ふ思はぬ山に心いるめり

七郎きみ、禪師の君に聞え給ふ。

君がすむ山路に露やしげるらむわけくる人の袖のぬれぬる

御かへし、

こけのきぬ身さへぞわれはそぼちぬる君は袖こそ露にぬるなれ

弟、禪師の君、

昔より山水にこそ袖ひつれ君がぬるらむ露はものは

二四 父大殿の夢

かくてこの入道の君、御夢に、おとどの君出家し給へりし御姿にて、この横川におはしまして泣きて聞え給ひける。」「なにをうしとて、かくはなり給ひしにか。尊とさはいと尊とけれどいと悲しくなむ。あはれに、とひきこえ給へば、それに助かることどもあり。さはあれどいとくちをしくなむある」などのたまへば、泣く泣く聞え給ふ。

「いとあはれなるすまひし給ひけるを、あまがけりてもたづねとぶらはむ。かかりとならばよにおち給ふな」とて、

君がすむ横川の水しにこらずはわがなきたまは常に見せてむ

御かへりごと、

いとどしく袖ぞひちぬる横川には君が影みば水もにこらじ

と聞え給ふほどに、やがてさめ給ひぬ。こひちかひ給ひて、御弟の君に語らひきこえ給ひてぞ泣き給ふ。

二五 父 君 か

さてかの入道の君の御子は、太刀はき給へる人を見給ひては「ててきか」とのたまふに、

「あらず」とのたまへば、「母君こそ、ててきにはあらず。などか、ててきの久しく見えざらむ」とて泣き給へば、
君よよと泣き給ふ。御ぐしかきなでて、「君は山にぞおはする」とて泣き給ふを、おほぢぎみ見給ひてのたまふ。

あしひきの山なる親を恋ひてなくつるの子みればわれぞ悲しき

北きたの方、

ひえにすむ親おやこひてなく子鶴こづるゆゑわが涙なみだこそかはと流ながるれ

ははぎみ、

沢水さしみづに立つ影かげだにも見えよかしこころ子鶴こづるのなきて恋こふるに

とて泣なき給たまふ。

かくてあはれなることがちになむありける。太刀たちはきたる人みても、「これやててき、などははきのもとにおはせ

ぬ。われをいただき給たまはぬ」とてなげき給へば、ははぎみ、

あふことのかたみも知らず浦うらになく舞鶴ひなづるみるぞ悲かなしかりける

北きたの方、

あふことのかたみとてだになぐさまでわらはなきにぞわれも泣なかるる、

おほぢぎみ、

かたにても親ににたらば恋ひなきになくを見るにぞわれも悲しき

三 新 少 将

兵衛佐の君、入道の少将ぎみの御かはりに、少将になり給ひて、よろこびに、この中納言殿に参り給へるを見給ひても、又せきやりがたき御けしきなり。「中の君少将は、山やまの君きみのかはりか」とて、

たがはずや同じみかさの山の井の水にも袖そでをぬらしつるかな

北の方、

たがふことすくなき見るはあはれなるみかさの君がかはりと思へば

このいかを少将も、思ひいで給ひて、涙なみだのこさぞおはしましける。「つかさもことに嬉うれしからず」とぞのたまひ

ける。「兄君あにきみのなりいで給たまはむしりにたちてありかむとこそ思おもひしか。よろこびにありかむことこの悲かなしきこと」とのたまひけれど、いかがはせむとぞありき給たまひける。

かくて近衛ちかゑづかきの人きて、歌うたひののしれど、なにのうれし・げもなくぞ、しほたれ

給たまひける。

名なにたてるみかきの山やまに入り来きても涙なみだの雨あめになほぬるかな

かへし、うけたまはる人の聞きえける、

みかさ山やまあめはもらじをいにしへの君きみがかざしの露つゆにぬるるぞ

二七 白銀の花瓶

桃園ももこのの中納言のの君きみ、白銀しろかねの花瓶はながめを四よつばかり作りて、その頃ころの花はなさして山やまにたてまつり給たまふとて、

山の端はかくしもあらじ君がため都の花は折れば袖ひつ

御かへり、

わがために君が折りける花みればすむ山の端の露に袖ぬる

さてこの花など、君たちみな聞え給ひて、みな登りて見給ふ。念仏堂には、この瓶に花たててなむ行ひ給ひける。

殿上の君、しかじかと、入道の君に語り給ふ。ある殿上人、

うらに住むものといふとも君ともにかめさへのぼるみやまなりけり

同く、殿上人、

横川てふ名にはたてれど今よりは亀山とこそいふべかりけれ

又、

あはれなる君によはひをゆづりてぞ横川に亀もたちのぼりける

返し、禪師の君、

久しくもなにかわが身を思ふべき亀の命は君にまかせん

六 近江の北の方

又按察殿より、桃園の北の方の御許に、近江の北の方の御文、「いかに世の中をおほしおはしますらん。幼き君たちを見たてまつり給ふに悲しくおぼすらむ。されど山にだにおはしませば、たのもしくおほしめすらむ。ここにこそ、人かずに侍らねど、ちちなしごをもてわづらひぬれ。それは世の中をなにとは思はむ。まつかの山の御すまひのあはれなるをなむ。里へ出で給ふまじとあるはまことか。されど御命だにおはせば、

あしひきの山に年へむとおもへども都・こひしくならばいでなむ

たとふべきことにはあらねど、死出の山いりにしおきなどもの、年をふれど逢ふことなく侍れば、いみじく」とあ

り。

北の方、姫君に、かくなむと聞え給へれば、姫君の、御かへり聞え給ふ。

「都をばいとひて山に入りぬれど恋しからねば思ひいでじを

道に忘れ草こそ生ひたらめ」となむ。

二元 綿物奉入

この禪師の君の御はらからの君たち、山は夏も寒かなるを、綿物奉入し・給ふ。中宮より、くるみの色の御直垂、

くちなし染のうちき一重ね、ふるきの皮のおほんぞ、青鈍の指貫、裕の袴、たてまつれ給へる歌、

「夏なれど山は寒しといふなればこのかはぎぬぞ風はふせがむ とてなむたてまつる」とあり。

御かへし、

山風もふせぎとめつるかはぎぬのうれしきたびに袖ぞぬれぬる

大納言殿の北の方のたてまつれ給ふ。いともきよげなる袖を青色に染めて、山吹色のうちき一重ね、青鈍の綾の指

貫、袷の袴ひとかさね、たてまつれ給ふ。そへられたる歌、

君がためたちぬひたれば露ぞそふ都の野辺の苔のきぬには

かへし、

そはりける露もたえせぬ苔のきぬいとど涙にぬれまさるかな

式部卿の北の方、ひとりおはすれば、ことなることおはせねど、人のものし給ふに思ひしりてもあらねど、ふすま

たてまつり給ふ。

露のごとよひあかつきにおくなればよるの寒さにふすまかさねむ

御かへし、

よるとてもうちみすまなき山伏やまぶしは衣ころもさだめずいま今よりぞしく

三〇 ころもがは

かくてこの中宮におはしますをみな人御ぞたてまつれ給ふが、かならずわれとたてまつらむとのたまひければ、
きさい宮われとぐしてたてまつらむとて、青鈍あせびのうちきひとかさね、同じ色おなじいろの袴はかまひとかさねなむたてまつれ給たまひけ
る。

きみが影いげみえもやするところも川かはなみたちぬひに袖そでぞぬれぬる

返し、

わがためになみのぬひけるころも川かはきてだになれむ年としをわたりて

三 湯かたびら

愛宮、われなにわざをせんとて、きぬの御かたびらひとかさね、ぬのの清らなると、御湯殿するかなむにとて、
きみがためなくなくぬへば世の中になみだもかかるところもたちけり

御返、「いであはれや、これよりこそ山昔のやうなりとも御衣はたてまつれまほしけれ、ゆかたびら、ただのと、いかにせさせ給へらむと、あはれあはれと見たまふるに、

たもとよりぬれけむそでもまだひぬにみにもしみぬるからごろもかな」

三 いみじくあはれになむ

わが北の方には、「あふことのかたみにとこそ見たてまつれ」となむきこえ給へりける。いみじうあはれとなむこ

とよりも愛宮あのみやのたてまつれ給たまへるをとりわきて泣なき給ひける。すべてすべく言いひつくすべくもなく、いみじくあはれ
になむ。

〔原本コノ次、裏表紙トノ間ニ一紙ヲ挿入シテ左ノ極メヲ書ス〕

此一冊者 たむの岑の少将
高光出家事

京極黄門定家卿真蹟無

疑貽而此草子世希有之

物也深可秘箱底如今依

若狭少将源忠勝朝臣所

望誌之

特進源通村 朱判